

# 論文投稿のすすめ

高 橋 和 裕

奥羽大学歯学会は52回、歯学会雑誌は38巻を数え、歴史と伝統の重みを感じられます。私も歯科医師となり、学会に入会して早、1/3世紀の歳月が流れましたが、他科の先生が報告する学会発表のお手伝いが、研究活動のスタートでした。

臨床の場に身を置き、研究を志す歯科医師の殆どは、数々の格言を耳にしてきたと思います。その一つに「研究テーマは臨床から見つけなさい」とう名句を多くの諸先輩から、一度は聞かされて今に至っているのではないのでしょうか。研究者の末席に就いた時から、この格言が自分の周りに住み続けています。一方、診療は先輩や憧れの人のスタイルをまねる、形から入る人が多いと思います。我々臨床の場は技術系を謳っていますので、徒弟制の名残でこのような形式になってしまうと思われれます。研究面において、自分の師匠や達人と称される先人の方法論を参考にするのは必然と推測されます。

課程博士が今ほど一般的でなかった時代には、診療や教育などに携わる一方で先輩の研究を手伝いながら、研究のノウ・ハウを学びました。その頃、顎関節症は殆ど手づけられなかった領域で、自分が携わっている研究を教授に説明する機会があり、手っ取り早くまとめやすいのが臨床・診療の統計でした。その折、自分が研究者として、臨床家として足りない部分を指摘・認識させられました。おかげで克服すべきハードルが見え、自分自身の向上心で一心不乱に努力できました。次に、「失敗から学びなさい」もよく耳にし、目にする言葉の一つだと思えます。失敗の原因や要因を探究することで、成功するための道筋が開けてくる場合があります。

2010年度版のモデル・コアカリキュラムに、歯科医師として求められる基本的な資質として「研究志向」（歯科医学・医療の進歩と改善に資するために研究を遂行する意欲と基礎的素養を有する。）が盛り込まれています。そこで我々臨床家は、自然科学を実践する立場から、自己を振り返り、次なる高みを目指し、臨床を科学することも生きがいの一つとして必要であろうと思えます。

研究や臨床を順風満帆で送る人は少なく、多くの方々は山あり、谷ありの人生を送っていると思います。私は、研究や臨床で行き詰った時、過去の実験や診療などの途中経過を一旦まとめ、自分の方法を顧み、欠陥や不備を見出すことで助かりました。その意味で論文記述は、自分の生き様を世に問う一つの方法であると考えます。ある人は、「自分の恥を世間に晒す」と表現しています。無論「・・賞」を受賞されるような論文はこの範疇には入りませんし、別格です。人生の半ばを超える頃、自分が最初に書いた論文を見直すと、あまりの稚拙さや冗長さに恥じ入ってしまうと、諸先輩方が話されていることを耳にします。学会員自身の論文を最初に読んでいただいた方は、先輩や教授

であったろうと推察できます。これが論文査読の最初ではないでしょうか。査読者が自分と同じ考えや意見を持っているとは限りません。一般に、同等もしくはそれ以上の知識をお持ちの方に依頼される場合が多いようです。多彩な内容を包含する組織や団体における査読では、論文の内容と異なる領域の方が選任される場合もあるようです。このような場合の査読者の指摘事項は、体裁に終始するのが常のようですが、内容に踏み込んだ査読があった場合、根本的な間違いや認識不足が指摘され、独善的な書き方になっていると考える余裕があってしかるべきでしょう。得てして、学位論文はこのような傾向があるようです。一般的にある種の規制の中で自分の意見を述べる訓練は、後々のコミュニケーションに役立ち、ひいては臨床家として有用な武器になるでしょう。わが身を顧みると、同様なことがあり、査読された方を非難したこともありました。同業、他分野の方による査読は、著者が予想していなかった指摘によって論文内容が単純となり、短くかつ理解しやすくなる場合もあります。一概に非難の対象になるものではないようです。査読を依頼される方々は、著者の文を更に良くし、より客観的にと考えているわけですから謙虚さが必要と思われまます。

臨床での論文記載は、自分の治療法や診断方法についての記述が多いと思われまます。今日、この内容に関するものは多くの方法が報告されています。その中から自分流を見出すためには、多くの症例から共通事項を見出す必要があり、一旦、自分を振り返る意味で、論文にまとめて反省点や検討項目を追加する必要があるでしょう。更に、例外点が見出され、研究すべきテーマが見つかる場合も多くあるようです。

近年、臨床情報を論文記載に使用する場合は、各施設の倫理規定に抵触の疑いが無いかを検討する必要がある場合があります。個人情報を使用するためには、個人情報に配慮してインフォームド・コンセントを実践した証明が必要となるでしょう。本学会雑誌は、査読制を導入して体裁から内容にまで踏み込んだ校閲が行われるようになっていまます。本学会の若い会員の先生方は、論文としてまとめ、今後の研究者としての一歩を踏み出して頂きたいと思ひます。是非、多くの学会員の皆様の論文発表があることを期待し、学会の更なる発展を祈念しまます。

(奥羽大学歯学部附属病院長)